

飛行機に乗りたがる妊婦

—— ボルネオ島先住民・ドゥスン族の女性の妊娠の社会性について ——

三浦哲也*

A Pregnant Woman Insisting on Boarding a Plane : Sociality of the Pregnancy among the Dusun in Eastern Malaysia

Tetsuya Miura

Abstract

Physiological conditions of human inevitably control its body. In that sense, a human body is said to be “natural”. Meanwhile it has a lot of variations in the way of movement or usage, apparently determined socially. Alternatively, human body is more emphasized on the aspect of the tool of social representation, as an entity putting something purposely or “read” intentionally, than on the aspect of biological body.

These are “naturalness” and “culturality and/or sociality” of human body, analyzed here by focusing on emesis gravidarum of pregnant women.

Emesis gravidarum is a “natural” reaction to pregnancy. However, cultural-social context of a pregnant woman restrict the way of expression of emesis gravidarum. That is, social meanings represented by pregnant women’s body are discussed by variation of channels of expression of emesis gravidarum.

Keywords: body, emesis gravidarum, culture, society

キーワード: 身体, 妊娠嘔吐, 文化, 社会

0. プロローグ

2005年2月のある日のことである。私は、東マレーシアのサバ州の内陸部の山間地域に位置する、先住民族ドゥスン族の村落に住み込んで、調査を行っていた。

その日は、朝早くから、水田で収穫された粳を出作り小屋から水田の持ち主の家へ運ぶ共同作業

が行われた。昼ごろまでにその仕事を終え、その後は、水田の持ち主によって、作業の参加者に食事と酒とが振る舞われる。それが彼らのしきたりである。

ドゥスン族の酒宴では、自らが醸した発酵酒 *tohmis* を飲む。コメやキャッサバを原料とし、アルコールが10%程度含まれる、ドブコクに似た酒である。この酒を、仕込んだ壺から竹のストローで、

* 育英短期大学現代コミュニケーション学科

あるいはコップに注いで飲む。

飲めば酔い、酔えば会話が弾み、男たちの口からは冗談や歌が飛び出し、女たちの口からは子どもの話や雑多な噂話。このような酒宴は、調査者である私にとって、多くの人から様々な話を聞くことができる貴重な機会でもある。

酒宴では、男は男で車座になり、女は女たちで酒を囲む。特に男女を分ける規範があるわけではないのだが、たいてい、自然とそのようになる。

その日も、私は男たちの間にまじって話をしていたのであるが、女たちの会話が、何やらひどく盛り上がっている様子である。そこで、男の車座を抜けて女たちの座に混ざり、何故そんなに大笑いしているのか、どんな面白い話なのかを尋ねた。すると、ある中年の女性が話し始めた。

「小学校の校長先生の奥さん、ミウラも知っているでしょう？ あの奥さんが、*monualing* でね、飛行機に乗りたいて言いたんだって。妊娠しているのに（笑）」

そこからは、別の若い女性が引き取って、「でも、*monualing* だからね。だから、校長先生は、仕方なく、コタキナバルからラブアン¹⁾までのフライトに乗せたんだって（笑）その後、ラブアンからは船でコタキナバルに戻ってきたそうよ（笑）」、ときも可笑しそうに教えてくれた。

彼女たちのほとんどが飛行機に乗ったことはないし、それどころか、サバ州から出たことすらない。しかし、知識として妊婦が飛行機に乗れないことを知っている。そして、妊娠しているのに飛行機に乗りたがる妊婦がいて、実際に乗った、しかも極めて短いフライトに乗ってすぐに帰ってきた、というのが彼女たちの笑いのツボであるらしい。

確かに、ほとんど無意味な旅行であるから、嘲笑したくなる気分は分かる。しかしながら、私は *monualing* というドゥスン語が理解できなかったの、それを尋ねた。すると、別の老齢の女性が教えてくれた。

「女は、妊娠すると、欲しくなるものがあるでしょう？ それが、*monualing* ですよ」

さらに、先ほどの若い女性が、「日本の女は、妊娠すると、どういうものが欲しくなるの？」と尋ねてきた。残念ながら、まだ結婚していないし、誰も妊娠させたことがないのでよく分からない、と言うと、そりゃそうだ、と一同が笑ってくれた。その上で、私が「たいていは、酸っぱい果物を欲しがることが多いんじゃないかな…」と答えると、その若い女性は、「あらまあ…、私たちと同じね」と少しがっかりした様子だった。もっと笑える答えを期待していたのかもしれない。

しかしながら、私には「同じ」とは思えなかった。日本においても、妊婦が、ある時期に食べ物の嗜好を変化させることは広く知られているが、ドゥスン女性たちの *monualing* とはだいぶ異なっているように思えた。彼女たちにとって、あるいはドゥスン族の社会において、*monualing* がどのような意味を持っているのかを理解しなければ、「飛行機に乗りたがる妊婦」の話でどうして大笑いできるのか、理解することはできないはずである。

1. 研究の目的と方法

本稿においては、妊娠を原因として発現する「つわり」という女性の身体の「自然な」反応が、どのように表現されるのかについて着目する。「つわり」という症状を手がかりに、妊娠女性たちの身体が表現していること、つまり、彼女たちの身体が周りの人々に対して放つ、社会的な意味について考察することを目的としている。

調査対象は、マレーシア・サバ州に居住するドゥスン族の女性である。ドゥスン族は、ボルネオ島の北部、東マレーシア・サバ州に居住するプロトマレー系の人々である（図1参照）。伝統的には水田および焼畑での稲作を主たる生業とし、精霊に対する信仰を保持してきた。現在は、農業従事者



図1 東南アジアにおけるサバ州の位置

も多くいる一方で、都市でホワイトカラーとして生活する者も多い。

彼らを指し示す民族名称は、これまで様々な政治的背景や民族文化復興運動などの文脈の中で、様々に転変してきた経緯がある²⁾。しかし、筆者が調査対象としている、サバ州の内陸部に位置するタンブナン郡に居住する人々は、近隣の「カダザン族」とは言語や習俗が異なっていることを強調する。本稿においては、タンブナン郡に居住する「ドゥスン」を自称する人々のみを指して、「ドゥスン族」という名称を使用する。

本稿で提示する資料は、サバ州の州都コタキナバルから南東へ60キロほどの山間部に位置する、タンブナン郡 KN 村（仮称）において、2005年から2007年にかけて実施した調査にて得られたものである。KN 村は、2007年3月の時点で、37軒の家屋に、230人のドゥスン族の人々が居住する村落である。川沿いの谷筋に3つの集落が点在しており、川べりの狭い平地に水田が開かれ、また周辺の丘や山の斜面では焼畑が切り開かれ、稲作や換金作物栽培が行われている。稲作を中心とする農耕

と、狩猟や漁労を組み合わせ、自給自足的な生業経済を維持している村落である（三浦 2001）。

本稿では、まず、身体の文化性についての先行研究をごく簡単に瞥見し、その次に、「つわり」の原因についての医学的観点から研究を参照する。その上で、ドゥスン族女性の妊娠と出産の文化、そして彼女たちの「つわり」の実態の分析を行っていく。

2. 身体の文化性

ヒトの肉体は、一定の生理的条件から逃れることは出来ない。ある特定の、呼吸が可能な空間でなくては生きていけないし、暑すぎても寒すぎても生存できない。生存のためには摂食せねばならず、摂食したら排泄せねばならないし、睡眠も必要である。個体群としてのヒトは、生殖行為が無ければ、維持されない。これを敷衍して考えれば、地球上のすべての社会・文化の存続は、ヒトという生物種の個体維持と種維持に関わる生理的欲求をすべてが充足されることにより、初めて可能に

なるのである。

その意味において、人間の身体は、上記のような動物性＝自然性によって条件付けられていると言える。

その一方で、日常的な身体の動かし方に対しては、社会的・文化的な規制があることを、私たちは実感的に知っている。例えば日本において「あぐら」は男性的な座り方であり、女性がそのような座ることが忌避されることがある。身体の動かし方には、男女によって、年齢によって、あるいは場面に応じて、最も好適とされるものが、意識的もしくは無意識的に選択される。

人間が身体を用いる際の多様な可能性に初めて注目し、それが社会的に伝承される技術、つまり「身体技法」であると指摘したのは、マルセル・モースであった。モースは、「身体は、社会・文化によって、その動かし方や用い方に差異があり、身体の動かし方はそれ自体、社会的に決定されている」と述べ、道具を用いる技術的方法論に先立って、さまざまな身体技法が存在することを指摘した（モース、M. 1976）。

以後、人文社会諸科学の研究と対象として、文化としての身体、あるいは文化の身体性が本格的に取り上げられるようになった。社会哲学においては、フーコーが身体管理をめぐる一連の著作を著し（フーコー 1977, 1986など）、これを準拠点にして、1970年代以降、管理・抑圧された近代的身体に関する研究が盛んに行われた。

文化人類学においては、米国コロンビア大学のフランツ・ボアズは、身体とその運動へ強い関心を持ち続け、彼の影響を受けたマーガレット・ミードとグレゴリー・ベイトソンは、バリ島民のしぐさや身ぶりから、文化とパーソナリティ形成の関係を理論化しようとした（Bateson, G. & Mead. M. 1942）。育児や睡眠、食事といった生活の中の身体動作の細かな分析を特徴とするルース・ベネディクトの日本人論『菊と刀』も、この「文化とパーソナリティ研究」の系譜上に位置づけられる。

以降、身体と文化に係る諸問題は、人文社会科学の諸分野において重要なテーマになり、表現活動のほとんど不可欠なモチーフとなっている（野村 1999：15）。

本稿では、上記のような身体の文化性の中で、特にコミュニケーションとしての身体のあり方に着目する。身体は、本節の冒頭で触れたように、生物的な肉体であるのだが、それと同時に、社会的な表現体であって、意図的に何かを表現することも、そしてそこに何かを「読まれる」こともあるのである（野村 1996）。例えば、街中を歩く男女が「手を繋ぐ」という身体動作を行っている場合、それは当人同士の身体的コミュニケーションであるのと同時に、その身体接触を見る第三者に対して、自分たちの関係をディスプレイしていることにもなる。

記号論的モデルで考えれば、人間の身体は、当該社会で共有されているコードの体系（記号体系）に従った「意味するもの＝シニフィアン」である。しかし、このことには、個々人の身体が、他者に向かって開かれているという前提があることに留意しておかなければならない。

3. つわり＝妊娠嘔吐について

妊娠によって起こる消化器系の症状を主とした症候を「つわり」（妊娠嘔吐：emesis gravidarum）と言い、悪心、嘔吐、食欲不振などを主徴とする。妊娠4～6週ごろから発症し、妊娠12～16週ごろまでに自然治癒するものが多いが、全妊婦の70～85%にみられ、気分や嗜好の変化が伴う場合が多い（森藤ほか 2007）。この「つわり」の症状が悪化し、食物の摂取が損なわれて栄養障害をきたし、体重減少など、治療を必要とする状態になった場合を妊娠悪阻（hyperemesis gravidarum）という。

妊娠嘔吐や妊娠悪阻の原因は、十分には解明されていない。妊娠によるヒト絨毛性ゴナドトロピ

ンホルモン (hCG) の影響や、高エストロゲン状態など、内分泌的变化を原因とする説や、タンパク質代謝の変化によるビタミンB₆の欠乏による説、食物による胎児の危険 (催奇形性) から守る生理現象と考える説などもある。

母性衛生や産科婦人科・周産期医学の分野においては、当然ながら妊娠悪阻への医学的・栄養学的対応＝治療の技術的・方法論的研究が重ねられているのだが、「つわり」の社会性もしくは文化性に着目した研究も、ごく少数ながら散見される。

妊婦のパーソナリティとつわり症状との関係を解析した瓦林は、「社交的な態度を好む傾向があるにもかかわらず、人からの反対に対抗的になり、願望通りことが運ばないと自信を失いやすく、心から気持ちを預けて欲求不満を癒すことができにくい妊婦は、内心の葛藤を身体言語として表現した強いつわり症状を呈する」ことを指摘している (瓦林ほか 1995)。一方で、性格の特性を示すとされる特性不安については、つわり症状との関連性がないという指摘もある (加古ほか 2003)。

生理学的な原因が何であれ、また、パーソナリティとの関連の有る無しにかかわらず、「つわり」という現象そのものは、ヒトの動物性＝自然性の最大の発露とも言うべき妊娠という身体状況に根ざしていることを、ここでは強調しておきたい。また、出現する症状には個人差が大きいということも留意したい。

4. ドゥスン族女性の妊娠と出産

ドゥスン族の女性は、月経 *bantat* が無くなる状態 *keyoon* になることによって妊娠を知る。妊娠は、男性の精液 *sarut* によってもたらされる。

妊婦には、出産までの間、様々な禁忌が課されるが、それは彼らの信仰する精霊 *tonku* との関わりによって説明される。例えば、妊婦は野外での排泄行為が厳しく禁じられているが、それは、地面や地中に住む精霊に汚物が掛かり、それに怒っ

た精霊が陰から侵入し、胎児に悪戯をするからである。妊婦やその夫が、ニワトリやスイギュウを虐めることが禁じられているのも、それらに乗って移動したり遊んだりしている精霊を怒らせないためである。

ある女性は、先天性の奇形で、左手の指のうちの1本が非常に短い。このことについて、その女性本人は「私の母が、私を身ごもっている間に、たぶん、ニワトリを虐めたのだと思う。そのニワトリに乗っていた精霊が怒り、母の腹の中に入って、そこに居た私の手指を、ニワトリの足のようにしたのだ」と説明している。

出産は、かつては、それぞれ家の中の小部屋で、無資格の産婆 *monikou* や、出産経験の豊富な女性親族の手助けを借りて行われた。その際は、悪い精霊＝悪霊による襲撃を防がねばならない。出産では女性が陰部を露出することになるし、体力も消耗する。生まれたばかりの新生児も非常に弱い存在であるから、そのような時に悪霊に襲われると、命を落とす危険があるのである。悪霊の侵入を防ぐために、家の戸や壁に、棘のあるライム (*Citrus aurantifolia*) の枝をくくりつける。

しかし、現在は、突発的な出産を除き、街の病院で出産することが多い。陣痛を感じた女性は、近隣の住民や親族に依頼し、車で1時間近く離れた街の産科病院へ入院するのである。

出産の後、数日以内に、*pusod* と呼ばれる胎盤と臍の緒の処理が行われる。すべての新生児は、本来は双子であると考えられており、新生児の出生後に排出される胎盤は、母の胎内で人間に成長することが出来なかった、新生児のキョウダイであると信じられている。そのため、*pusod* には魂が宿っていると信じられており、適切に処理する必要がある。

pusod は、竹の筒やアルミ缶の中に入れられる。悪霊から守るためのライムの木の枝を差し込んで、それを家の壁の外側に吊しておく。すると、*pusod* の魂は、壁越しに自分のキョウダイの泣き

声や、父母、家族の話し声を聞くことが出来て、安らかな状態になる。そして、しばらくすると、その魂は *nabalu* と呼ばれる先祖の魂が集まる場所へと旅立っていくと考えられている。病院で出産した場合でも、夫婦は医師や助産師から胎盤を受け取り、この儀礼を行うのである。

出産の後の4・6・8日目のいずれかの日に、命名の儀礼 *persira* が行われる。男児には雌鶏の、女兒には雄鶏の尾羽を額に載せ、呪術師が祝福の呪文を唱え、最後に両親から名前が付与される。

このように、ドゥスン族女性の妊娠と出産は、ドゥスン族の精霊信仰を中心とする世界観の中に位置づけられている。

KN村では、多くの村人がカトリックに入信している。そのため、呪術師を呼んで行う命名式を行わない夫婦も増えてきている。しかしながら、伝統的な呪術師による命名式を行ってから、教会へ赴き、小児洗礼を受けるというケースも多い。ドゥスン族は、伝統的な精霊信仰とカトリックの教えの両方に折り合いを付けながら、緩やかな信仰体系を組み上げているのである（三浦 2006）。

5. ドゥスン族女性の *monualing*

一般に、KN村のドゥスン女性は、妊娠判明後に感じる嘔吐感や食欲不振などの妊娠嘔吐の諸症状については、「病」*sakit* と認識する。そして、妊娠を原因とする病であるから、治すことは出来ないと考えられている。

だが、病院での出産が一般化するのと同時に、妊婦が産科病院で検査を受けたり、保健婦などから指導を受ける機会が増えたりしたことにより、若い世代の女性たちの中には、妊娠嘔吐について医学的な知識を持つ者も増えている。

その一方で、食物の嗜好の変化、特に、特定の食物を食べたくなる現象は、*monualing* と呼ばれ、妊娠嘔吐の他の諸症状とは別の現象として認識されている。ただし、食物を食べたくなるだけ

でなく、食物以外のものが欲しくなる場合もある。*monualing* の原因については、「胎内の子どもが、母親に欲しがらせているのだ」と説明される。さらに、*monualing* の特徴として、次のような内容が語られる。

「*monualing* で食べたくなかった物を食べられないと、その妊婦はおかしくなる。泣いたり叫んだり、発狂したようになる」(30代女性)

「*monualing* について、何故そのようなことが起きるのか、医者も合理的な説明が出来ない。でも、その欲求を満たしてやれば、出産が安全になる」(50代男性)

「同じ女でも、妊娠のたびに、違うものが欲しくなる。一口食べれば満足することもあれば、どれだけ食べても食べ足りないこともある」(60代女性)

「イスラム教徒なのに豚肉が食べたくなったり女性や、人の血を飲みたくなったり女性の話聞いたことがある」(20代女性)

monualing でどのようなものが欲しくなるのかを具体的に把握するため、KN村において出産経験のある女性に、聞き取り調査を行った。聞き取りの対象としたのは、任意に選出した、10名の女性である。年齢層の構成は、いずれも調査時の満年齢で、20歳代3名、30歳代3名、40歳代2名、60歳代2名で、平均年齢は38.8歳であった。女性の本人からの聞き取りだけでなく、その夫、夫の母親、実母などにもインタビューを行い、情報の確度の向上を図った。その結果、10名の女性の延べ48回の妊娠に関する情報が得られた。

この48回の妊娠のうち、5回 [11%] では *monualing* が伴わなかった。一方、*monualing* として挙げられた品々としては、ライム、マンゴー (*Mangifera indica*) などの酸味を含む果実が28回 [59%]、バナナ (*Musa spp.*) やジャックフルーツ (*Artocarpus heterophyllus*) といった甘味を含

む果実が4回[8%]、缶詰食品(コーンビーフ・鰯のトマト煮)が2回[4%]、菓子(ビスケット・飴)が2回[4%]、*mee sup* と呼ばれる汁ソバが2回[4%]、そして、酒・ヒゲイノシシ(*Sus barbatus*)の肉・ニンニク(*Allium Sativum*)が各1回[各2%]であった。さらに、食べ物でないものを欲した例が2回[4%]であった³⁾。

これを、それぞれの妊娠の年代ごとに見てみると(表1参照)、1990年以前に求められたのが果実だけであるのに対し、1990年以降、唐突に、求められる品目数が増えていることが分かる。

1991年は、KN村にとって、重要な出来事が発生した年である。それは、タンブナン郡の中心部の市街地へと繋がる自動車道路の開通である。それ以前は、役場への手続きや、日用品の買い物などのために市街地へ行くためには、KN村から見て西側の峠を徒歩で越えて、隣村を通る幹線道路に出て、不定期に走る乗り合いバスを利用するしかなかった。KN村から峠を越えて隣村まで、大人の脚で約1時間半、そこからバスに30分揺られてようやく市街地へ出ることが出来た。

しかし、1991年にKN村に自動車道路が開通したことで、市街地へ直接行くことが出来るようになった。道路は舗装されておらず、所々に悪路も

あるため、自動車でも1時間近くかかるものの、重い荷物を運ぶことも容易になり、大幅に利便性が向上した。

そのように市街地へのアクセスが容易になったことを受けて、村人の数人がバイクや自動車を購入した。これにより、村人は、市街地へ出かけることが容易になっただけでなく、市街地で販売されている物品も気軽に購入できるようになった。

妊婦たちは、この大きな社会変化に敏感に反応したと考えられる。それは、この1991年以降、*monualing* として、村内では手に入らない様々なものが求められるようになってきているからである。

季節性の強いものを除けば、たいいていの果実は村落内で入手できる。しかし、缶詰や菓子といった工業生産の食品や、レストランで供されている食べ物である汁ソバは、入手するためには市街地まで出かけていかねばならないのである。そうであるからこそ、妊婦たちは、市街地へのアクセスが容易になったとたんに、市街地で手に入る多様な様々な品々を欲しがり始めたと考えられる。

その背景としては、「夫は、妻が *monualing* で何かを欲したら、それを手に入れて来なければならない」という規範が存在する。

妻は、「胎児が欲しがらせている」という大義名

表1 妊娠時期と *monualing* として求められた品目との関係

品目	妊娠の時期							合計
	～1975	～1980	～1985	～1990	～1995	～2000	～2005	
酸味果実	3	3	5	7	4	3	3	28
甘味果実	1			1	1	1		4
缶詰					1	1		2
菓子					1	1		2
酒					1			1
汁ソバ					2			2
ニンニク					1			1
イノシシ肉						1		1
非食物						1	1	2
なし				1		3	1	5
合計	4	3	5	9	11	11	5	48

分のもと、夫に要求する権利を有していて、夫はそれをかなえる義務があるというわけである。もし夫が、妻の *monualing* の要求に応じない場合は、妻はそのことを親族や近隣の者に訴える。そうなれば、夫は、「妻の願い、子の願いも聞いてやれない、狭量な男」と罵られ、彼の社会的評価は著しく下がることになる。

そうならないために、夫は妻の *monualing* に対しては、その要求に応えようと努力するだろうし、一方、妻の方も、夫に実現可能な、現実的な要求をしていると考えられるのである。

6. 考察と課題

前項では、ドゥスン族女性たちの妊娠について、いわゆる「つわり」の諸症状の中の、特に、食物の嗜好の変化に着目し、分析した。その結果、妊娠を原因として生じる *monualing* が、自動車道路の開通という社会的な要因に影響を受けていることが明らかになった。

monualing は、人間の身体の営為の中で、最も動物的で自然な現象である「妊娠」がもたらす現象である。しかしながら、社会環境の変化から強く影響を受けるのと同時に、妻の要求は胎児の要求として正当化され、夫がこれに応える義務を負うという文化的要因も関係しており、非常に複雑な現象であると言える。言い換えれば、ドゥスン族女性にとって、つわりの一症状である嗜好の変化は、自然な身体的状態である一方で、極めて社会的・文化的な身体的現象であるということである。

ところで、このドゥスン族の *monualing* のように、つわりの時期に妊婦が特定の食物を強く要求する現象は、*food cravings* と呼ばれ、東南アジアおよび南アジアにおいて広く確認されている。

例えば、スリランカのシンハラ社会においては、同様の女性の要求は *dola-duka* と呼ばれ、夫はこの要求を拒むことは許されず、もし拒んだ場合に

は胎児の耳が腐るとされている。女性は、米やカレーといった日常的な食品ではなく、手に入りにくい高価な菓子、男性を象徴するバナナ、故郷の食品などを要求するのである。シンハラ社会は男性による女性への抑圧が強い社会である。日常的に抑圧されている女たちは、妊娠すると、妻や母としての役割に象徴的に結びつく米やカレーといった食品を拒否する。その一方で、夫にとって金銭的にも物理的にも入手困難な食品や、女性の潜在的な欲求を満たす象徴性をもった食品を要求するのだという (Obeysekere 1963)

松岡は、妻は妊娠することによって、夫に従属する関係を逆転することができるのであって、妊娠は優位者を意のままに動かす、劣位者の反抗の一つの形である、と指摘している (松岡 1991)。

シンハラ女性の *dola-duka* も、ドゥスン族女性の *monualing* も、妻から夫に対して、何かを要求するための正当な機会になっている点で共通しており、彼女たちの身体は、この現象を通じて社会的に意味のあるメッセージを発していると言える。

一方、シンハラ社会と比較した場合、ドゥスン族社会では夫は妻に対してさほど抑圧的ではない。そうであるなら、*monualing* を、夫と妻との関係の中だけではなく、もっと広い人間関係の中に位置づけて捉えることによって、妊婦が発する社会的な意味の深みを理解することができるかもしれない。

さて、本稿の第2項の末尾において、人間の身体は、当該社会で共有されているコードの体系(記号体系)に従った「意味するもの=シニフィアン」であるが、このことには、個々人の身体が、他者に向かって開かれているという前提があることに留意する必要がある、と述べた。

ドゥスン族社会のコード体系の中においては、女性の身体は、妊娠の過程において、*monualing* という現象を通じ、「夫が拒絶できない要求」を意味するところとなった。そして、このことの背景

には、妊婦たちの身体が、その情報を伝達するという文脈において、他者に向かって開かれたものとして認識されているという前提が存在している。夫が拒否できないのは、妻の要求が第三者にも明示されているからに他ならないからである。

コミュニケーションのとしての身体を考察する論集を編んだ菅原は、その序文において、身体が「一義的な『意味されるもの(シニフィエ)』を越えて、いわば『過剰な意味』をおのずから分泌したり、それを付与されたりするさま」を、具体的な文化と社会の場において確認する必要性を説いている(菅原 1996:28-29)。

プロローグで紹介した、飛行機に乗りたがる妊婦は、その身体から、まさに「過剰な意味」を分泌していたと言える。なぜなら、彼女の身体が発したのは、単に夫に対する「飛行機に乗る旅行の要求」のみに留まらなかったからである。彼女の要求の突飛さ、その旅行を実現することができてしまう夫婦の経済力、そしてその旅行の無意味さ…、など、それこそ「過剰な意味」を分泌し、その分泌物は、村人たちに、羨望と嘲りの混じった、複雑な笑いを提供したのである。

7. エピローグ

KN村では、2006年から電力の供給が始まり、その後、あっという間にすべての世帯にテレビが普及した。そして、テレビの次に何を買うかで揉める夫婦の話をよく聞く。夫たちは衛星テレビ放送の受信設備やDVDプレイヤーなどを欲しがり、妻たちは洗濯機や冷蔵庫といった生活家電の購入を望むのである。少ない現金収入をやりくりしながら、何を買うのか、夫婦であれこれ悩んだり、相談したりしている様子を見聞きすると、なんだか微笑ましい気持ちになる。

だが、2009年の調査中、やはり、酒の席での、女たちとの会話の中でのこと。

ある中年女性が、「私、どうしても、洗濯機が欲

しいのよ。でも、夫はいつになっても、買ってくれないの。だから、次の子を妊娠した時には、私、たぶん、洗濯機を *monualing* しちゃうわよ」と語り、周囲の笑いを誘っていた。

今のところは冗談で済んでいるが、いつか、KN村の女たちが、高価な電化製品を *monualing* する時が来るかもしれない。そう思うと、私は、人類学者という立場を離れ、単に同じ男として、ドゥスン族の夫たちに対する同情の念を禁じ得ないのである。

〈謝辞〉

本研究のための現地調査の一部は、次に挙げる各研究助成により実施することができました。記して感謝申し上げます。

- 科学研究費補助金(基盤(A)(海外))『ボルネオ島における「自然災害」の人文学的研究』(課題番号17251015)(研究代表者:東北学院大学教養学部助教授・津上誠)=2005年度
- 科学研究費補助金(基盤(B)(海外))『東南アジア諸都市における宗教の活性化と日常生活の再編に関する比較研究』(課題番号18401037)(研究代表者:筑波大学特任教授・小野澤正喜)=2006~2008年度
- 日本科学協会「笹川科学研究助成」(研究課題「社会組織としての家の再検討—東マレーシア・ドゥスン族の事例から—」,研究代表者:三浦哲也)=2006年度

〈引用文献〉

- Bateson, G. & Mead, M. 1942 *Balinese Character*, Special Publications of the New York Academy of Sciences; vol.11
- フーコー, M. 1977年 『監獄の誕生』, 新潮社
- フーコー, M. 1986年 『性の歴史1 知への意志』, 新潮社
- 藤森敬也・園田みゆき・牛嶋順子・佐藤 章 2007年 「妊

娠悪阻], 『産婦人科の実際』 56-11, pp.1784-1789
 加古亜紗子・後藤節子・水野妙子・岩井美晴 2003年 「つわり症状に対する心理的および生理学的アプローチ」, 『母性衛生』 41(1), pp.39-44
 瓦林達比古・堤啓・渡辺大介 1995年 「妊婦のパーソナリティ分析とつわり発症の関連性について」, 『日本産科婦人科学会雑誌』 47(6), pp.547-552
 野村雅一 1996年 『身ぶりとしぐさの人類学—身体が示す社会の記憶』, 中公新書
 野村雅一 1999年 「技術としての身体—二十世紀の研究史から」, 『叢書身体と文化1 技術として身体』, 大修館書店
 松岡悦子 1991年 『出産の文化人類学[増補改訂版]』, 海鳴社
 三浦哲也 2001年 『東マレーシア・サバ州における山間地農耕民ドゥスン族の生計維持機構』, 筑波大学大学院修士課程環境科学研究科学学位論文
 三浦哲也 2006年 「東マレーシア・ドゥスン族の信仰と日常生活」, 『アジア遊学89 宗教を生きる東南アジア』, 勉誠出版, pp.110-120
 モース, M. (有地亨, 山口俊夫訳) 1976年 『社会学と人類学II』, 弘文堂
 Obeyesekere, G. 1963 Pregnancy Cravings (Dola-duka) in Relation to Social Structure and Personality in a Sinhalese Village. *American Anthropologist* : 65, pp. 323-342
 菅原和孝 1996年 「コミュニケーションとしての身体」, 『叢書身体と文化2 コミュニケーションとしての身体』, 大修館書店
 上杉富之 1999年 「民族と文化の創造—東マレーシア・サバのカダザン人の事例から」 田村克己編 『文化の生産』,

ドメス出版
 山本博之 1993年 「サバのマレーシア加入とカダザンナショナリズム」, 『アジア経済』 34(11), pp.18-36
 山本博之 2002年 「カダザン人のナショナリズムとエスニシティ」, 『ODYSSEUS』 6号, pp.41-60
 山本博之 2007年 『脱植民地化とナショナリズム 英領北ボルネオにおける民族形成』, 東京大学出版

〈注〉

- 1) コタキナバルはマレーシア・サバ州の州都であり、空港がある街としては本研究の調査地から最も近い。ラプアンは、サバ州の西海岸に浮かぶ島である。コタキナバルからほど近く、飛行機では20分ほどである。
- 2) 現在サバ州となっている地域(旧・英領北ボルネオ)の先住民は、1963年にイギリスから独立してマレーシア連邦に加盟する際、自らの権利を守るべく「カダザン族」として結集し、マレー化、つまりイスラム化されない保証を獲得した。その後、「カダザン族」の民族文化運動が隆盛する一方で、その民族名が指し示す民族集団の範囲をめぐって激しい議論が交わされた(山本 1993, 2002, 2007, 上杉 1999)。現在、「ドゥスン族」は、公的機関や人口統計、特に政治的な場面においては、サバ州西海岸に居住する「カダザン族(Kadazan)」を称する人々を中心に、複数の民族集団とあわせて、「カダザンドゥスン族(Kadazandusun)」と集合的に称されるのが一般的となっている。
- 3) この2例のうち、ひとつは、「蛍光灯の明かりを見つめたくなくなった」というもの。もう一例は、ビンロウの実に、タバコとキンマの葉、さらに石灰を加えて作られる siri と呼ばれる女性向けの伝統的嗜好品が欲しくなった、というものであった。

2010年11月30日 受付
 2010年12月16日 受理